－所蔵作品紹介－

山口　健智　YAMAGUCHI Kenchi

画家の像（自画像）

がかのぞう（じがぞう）

作品データはこちら

画家43歳、渡仏９年目の自画像である。写真ではなく鏡を見て描かれた像であろうことが、右利きであった画家の左手に握られた一本の絵筆によって推測される。すなわち、厳しく外に向けられている眼ざしは、画家自身が自らを覗き込むそれである。黒い背景に深い紺のセーターというきわめて禁欲的な場面設定のなかで、意志的な相貌を見せる顔と、絵筆をしっかりと握る両の手が、ひときわ明るく、見る者の心をひきつける。画面左上に記された金色の年記とサイン、更には、自らの姓の漢字の組み合わせによって、仕立てられた赤いモノグラムは、明らかに北方ルネサンスの巨匠達のサインの記し方に従ったものである。

少年、山口健智は、庁立旭川中学校（現・旭川東高等学校）進学後、病に倒れ、病気療養中に、アルブレヒト・デューラーの複製画を見て感銘を受ける。後、ヨーロッパ古典美術に強い関心を抱くようになり、兄・山口正城を頼って、大阪、京都で洋画を学ぶ。現地での実作による研究に対する願望がやみがたく、パリに渡ったのは34歳の時であった。以降ルーヴル美術館に日参して、ジョルジョーネ、コレッジォ、フェルメールなどの模写を重ねる。一点の模写に４・５年もかけてコツコツと仕上げ、徐々に運筆や絵具の取り扱い方を学んでいった。この間、裸婦や風景画を独自の構図によって手掛け、サロン・アンデパンダンやル・サロンに対する出品によって、フランス本国における評価を高めていった。

「画家の像」すなわち、本作品を仕上げた頃、画家、山口健智は、足掛け10年に及んだルーヴルでの模写に終止符を打った。以降、その成果をもとに、静物画やマッチ棒によるコンポジションで独自の世界を切り拓いていった健智であるが、そうした意味でも本作品は、彼のヨーロッパ古典美術に対する総決算の意味がこめられていたのであろう。デューラーの「1500年の自画像」を意識した場面設定、あるいは、健智が敬服してやまなかったレンブラント晩年の自画像を想定においた構図は、彼が、いにしえの巨匠達の技量と構成力に、いかに心服を置いていたかを物語る。

旭川美術館だより「氷華」No.20（1989.３発行）「収蔵作品から」より